



#### <略歴>

1948年 北海道端野町（現北見市端野）で生まれる。  
阿寒湖温泉町在住。西田正男氏と結婚したことを機に、秋辺カツミフチ、小鳥サワフチから刺しゅうの手ほどきを受けて刺しゅうを始める。現在も、若い後進の指導をしながら、自身も精力的に刺しゅう作品を作り上げている。丁寧で柔らかく、優しい模様が施された作品は、見る人を引き込み、感動を生み出している。

#### <受賞歴>

- 北海道アイヌ伝統工芸展  
奨励賞（1997）北海道議会議長賞（1997）北海道知事賞（1998）  
審査員特別賞（1999）優秀賞（2001）
- アイヌ民族文化財団 アイヌ文化奨励賞（2019）
- 文化庁長官賞（2020）

## 西田 香代子 Kayoko Nishida

“昔の人は、生涯で何着も着物作れたわけがないから、だから丁寧な仕事をしてかないと、着るものがなくなっちゃうよ？綺麗にとかじゃなくて丁寧な仕事だね。材料が無駄にならないように。”

“昔の人に会っていないけど、その人たちってすごいエネルギーを作品に費やしているんだと思う。模様のついた着物というのは儀式的時に着るものだから、その儀式的時に何事もなきようみたいな、神々に対する敬意でもあるし、自分たちを守るものでもあるし。”

“だって大切な人のために作るわけだからね。恋人のようにその人のことを思いながら作るわけでしょ？だって、仕上がった様子この人は何が好き、この色が好きみたいな。だから一枚の着物出来上がったから、3年ぐらい命縮まるかなって。”

“少しでも柔らかく綺麗に。やっぱり神々に見てもらって気に入ってもらって、自分もきちんと想いをつなげるといふか分かってもらうとか、そういう風な想いで刺しゅうするから、だから自ずとそうなるでしょう。”

“丁寧に綺麗に、仕上げるという。それは、針を作ってくれた人、糸を紡いでくれた人、布を織ってくれた人、自分一人ではないわけじゃない？この着物一枚作る出来上がるまでは。そうするとそういう人たちの力を借り、自分は少しの手を加えて仕上げていくものだから、そういう想い、そういう風に思いながら刺しゅうするよ。”

“綺麗だけじゃなくて、ちゃんと落ち着いたときに、イライラした時じゃなくて、穏やかでいる時に針を持たないと、力も貸してくれないよね。針の神様だってね、だから針の神様に踊ってもらうんだよって。踊ってもらうには、機嫌よく踊ってもらわないとそういう作品ができてこないよねって。”

“模様をつける時にも責任感っていうのは、日常いつでもどこでもそういうことを思ってなくてはならないと思う。普段きちんとした行いをしてなくて、模様をつけて守ってくださいでは通らないと思うね。”

# わざ 技

Hands and Hearts  
vol.6





### <略歴>

1948年 平取町二風谷に生まれる。平取町二風谷在住。  
中学生のころ、病気で入院していた母の代わりに、はた織りを始める。  
母の退院後、布糸となる木の皮をはがすところなどの織り方を教わり、アイヌ文様などは萱野れい子氏に師事し、アットゥシ織の技術を受け継いだ。  
現在は二風谷アットゥシの技術伝承者として、あたたかみのある、優しい雰囲気 をまとう多くの作品を創り出している。

## 藤谷 るみ子 Rumiko Fujiya

### <受賞歴>

- 北海道アイヌ伝統工芸展  
理事長賞 (1993) 審査員特別賞 (1994、1996、1997、1998)  
北海道知事賞 (2011、2014)
- アイヌ工芸作品コンテスト 優秀賞 (2015)
- 第 19 回アイヌ語弁論大会 (イタカンロー) 口承部門 最優秀賞
- 平取町 芸術文化奨励賞 (2015)

“織りだけをやってきた。私がモノ作りというか、自分の織ったアットゥシで作品を作りたいと思ったのは、私が 30 代を過ぎたころ。”

“萱野れい子さんの仕事の撮影が結構あったのでなんでも外に出て見てたんです。とにかく目で見て覚えようって。見たらすぐ実践したい。だから本当にいい時期にやりたいと思う時期に、いい仕事をたくさん見せてもらった。れい子さんほどはできないけれど、自分がやることができたというのは一番いいかな。”

“織りは母親なんです。糸の作り方から木の皮を剥ぐところ、煮るところ、そういったところは入院して帰ってきた母親が。母は私の人生の最高の師であり、織りの手仕事をさせられたことに感謝です。”

“れい子さんとの思っているのは、れい子さんの手仕事見られたっていうことが一番。黙々と料理でもなんでもやる。それをそばでお手伝いをしながら、できるようになりたいって形ができ、自分も現役で年を重ねていきたいなって思わせてくれる最高のお師匠さんです。”

“アイヌ文様ってどこでもめても、必ずそこからつなげていける。どこへでも。文様は動かせるから、北海道いっぱい広げられるんじゃないかとおおげさに思うくらい、文様って広げていけるのね。どこからでもつなげていける。長い歴史のなかでできた文様に、すばらしい、美しいアイヌ文化の形を残してくれた先祖に感謝です。”

“刺しゅうをするときは、必ず 6 本の針を使うんです。刺しゅう糸用ね。6 ってアイヌ文化の中では、すごく縁起のいい数字だってことで。片手より多いって数字がね。”

“自分の手染めの糸で織り、その糸でアイヌ文様を入れて、お客さんに手渡してあげるために制作してるので、縁起がいいのであれば、6 本の針の方がいいかなって。ずっと 6 本の針使ってます。”

“アイヌ文様って入れたのだけが文様でなく、この残りの空間、間合いね、これもひとつの文様なんです。針で入れたところだけが文様ではなく残った所もクネクネ色んな自然が入っていますからね。川の流れだったり山であったり草であったり。大事にしたいと思います。本当に今は若い人たちが育っています。地元を大事に、これからも生まれたこの二風谷で、手仕事を続けたいと思っています。”



### <略歴>

1954年 浦河町に生まれる。幕別町在住。  
1998年に北海道ウタリ協会幕別支部 (現幕別アイヌ協会) の支部長に就任。  
約 20 年ぶりにイチャルパ (先祖供養) を復活させるなど、幕別町における多くのアイヌ文化普及活動事業の発足に力をいれた。  
現在は、学校や社会人団体等に出向き、アイヌ文化の伝承・普及・理解発展のための活動を精力的に行っている。

## 山本 みい子 Miiko Yamamoto

### <受賞歴>

- 北海道アイヌ伝統工芸展  
優秀賞 (2006、2011) 北海道知事賞 (2010)
- アイヌ工芸作品コンテスト  
入賞 優秀賞 (2007、2008)・幕別町文化奨励賞 (2013)

“私はアイヌ文化に携わるようになったのは、平成 14 年芽室のフチとの出会いがきっかけでした。”

“芽室のフチから、縫い物、食べ物、ゴザ織り、カバン作り、色んなものを教え込まれました。そして札幌へ通い、津田命子先生、上武やす子先生、加藤シヅエ先生からは、さらに深くアイヌ文化を学びました。その先生方はやさしさと厳しさを両方持ち合わせた方々で、その方々がいたから、私もこうやって続けてこれたのだと思います。”

(幕別町蝦夷文化考古館所蔵のカバラミブを複製するにあたって、どのような気持ちで複製を進めていますか。)

“先人・先輩たちは、時代をさかのぼるほどに、差別により生きづらかったことがあったと思います。この着物を作った方にはその人生があったわけだし、思いやりと愛情を込めて作っているのが、見て取れるんです。こんなにたくさん手をかけて作って、それは、着てくれる方を思っていることだと思うので、ひと目たりとも気を抜けません。作り手に添った作業をしないといけないと思います。”

“着物を作る時に、きれいに作ろうとか、そういうことはあんまり考えません。誰のために作ろうか、決めるんですよ。かわいい子どものために作ろう。母のために作ろう。”

作る対象者がいると、手渡したときにその人の喜んでくれる顔を見れるんですよ。だから、できるだけ対象者を見つけて、その人のために作ろうという気持ちで、私は制作しています。”

“制作しているとき、難しいと思うことがつどつどありますが、うまく出来たときは、なかなかおもしろいもんだなー! と思います。”

(毎年小学校で行っている、アイヌ文化の普及活動について)

“自分にとって一番いいな—と想っていることは、アイヌも偏見なく見てもらいたいということ。みんなと同じもの食べてますよ。みんなと同じように生活していますよっていうことを、理解してもらえれば。”

“みなさん「アイヌ」っていう言葉どういう意味か分かりますかっていうことを、いつも質問させてもらっています。アイヌっていう言葉を、日本語に変えると、人、または人間。人という字は支えあいますよね。人間は支えあう間柄って書きますよね。だから私自身とってもすばらしい言葉だなって思ってますっていうことを皆さんに発信します。そして子どもたちと交流を持ってるっていうことは、正しいアイヌ文化の理解促進につながるのではないかと思い、私自身、喜んで、行かせてもらっています。”